
猫虎の素

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫虎の素

【著者名】

Z4662A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

気づくと俺は変なぬいぐるみになつて、その後ろには妖しい女の子がいた。俺はどうなつたんだつ！そして、この子は誰なんだよ！

色々な事が起きる現代。日々進歩している文明。そんな事を考えながらふと、自分の事を見てみると、なんとも奇妙な感じだ。

なんでこんな事になつているんだろう……。

「なんだ、こりや……」

俺は自分の姿を鏡で確認して驚いていた。

「えつと……猫？ 虎？」

鏡に映るのは猫みたいな虎みたいな生き物。俺が右手をあげれば、鏡の中も右手を上げる。

首を傾げると、鏡の中も傾げる。うむ……間違いなく、”これ”は俺だ。

「これは、俺だな……しかし」

鏡は全身を映せるタイプの物。

しかし、俺が映つているのは鏡の下の方 30CMくらいのところだつた。

「小さくなつてる？ しかも……これ、フカフカ？」

なんていうのか……その、人形なのか、ぬいぐるみなのか、おもちゃなのか、よく分からぬ感じ手触りで、毛がフカフカして、結構気持ちいい。俺……結構、馴染んでないか？

「……それに、誰だ？」

俺の見てる鏡には”この”俺の姿以外に、もう一人映つていた。女の子なんだけど、俺の知り合いではない。と言づか、こんな知り合ひはない。

「誰だ……あんた？」

取り合えず、鏡越しに聞いてみる。だつて、動けないから。

「えつと……その、初めまして、わ、わわわ、わたしは……」

一人パニック状態で、勝手に慌てふためく女の子。

アタフタして、ジタバタしてる何とも妖しい、いや落ち着きがない女の子だな。

「落ち着け」

「ふあ！ は、ははは、はいっ！ すつーはあー……」

訂正しよう 多分、こいつは馬鹿だ。いや、絶対に馬鹿だ。

「それで……お前は、誰だ？」

「わ、わわわ、わたしは、リームと申しますっ！ ……えつと、あの、貴方はどちら様で……」

自己紹介を終えた女の子 リームは、今度は俺に聞いていた。この女は絶対におかしい。直感と言つか、俺の五感がシックスセンスを覚醒するくらいの勢いで、断言している。

こいつは……おかしい。

「お前は……初対面の人間に、こんな事をするのか？」

「は、わわわっ！ じ、じ、じ、ごめんなさい！ だつて……神様

が

「……ん？ か、かみさま？」

「この子は……その。かわいそうな子なのか？ 痛い子なのか？」

「……神様つて？」

「神様は神様です。えつと……自己中な神様として、私も結構苦労してまして……」

ハンカチで涙を拭く真似をするリームは、自分の身の上話を始めてしまった。

面倒だが、とりあえず話を合わせておかないと、色々と大変そうだな。

「大変そうだな……お前も」

「分かってくれますかあ」

「ああ……それで何しに来たんだ？」

俺の質問に呆然とした表情のまま、固まってしまったリームだが、微動だにしない。

「おおーーー生きてるか?」

「……にゅーー 私は誰?」

「ボケるな。さつさと答える」

「はい。そんなに怒らなくても……気が短い人は短気って言います」

「当たり前だ。訳の分からん事を言うな」

なんとも真顔でボケてくるこの馬鹿を、無視したい気分なのだが、そもそもいかない。そもそも話が進んでない。と言うか、寧ろ話がずれていく。軌道修正しなくては。

「それで……俺はどうなってるんだ?」

「いきなり戻りましたね。えっと、貴方はどちら様で……」

「俺は智明。早良智明だ」

話がループしちゃうなので、止めてみた。こいつは絶対に天然馬鹿だ。

「……さわりちかん?」

「さわらちあきだつ!」

「じ、ごめんなさい! それで智明様……」

頭を抱えて蹲つたかなり痛い子が、俺を潤んだ目で見つめてくる。その目は反則だと思うのだが、ね。

「なんだ? ……メイド」

「私はメイドではありません。一応は、これでも天使です」

「どーに、メイド服を着た天使がいるんだよ」

「ここにいますっ!」

自信たっぷりに胸を逸らしていくリームは、得意げな顔をしていた。

なんとも、真平らな胸が哀愁を呼ぶ事だ……。

そこだけは、見なかつた事にしよう。こいつの為だと思つので

それよりも、やつてしまつていいだろうか?

「だ、だだだ、ダメですっ! わ、わわわ、わたしは……その」

「……何を言つてる？」

慌てふためき、顔を真っ赤に染めて危ない事を口走つてゐる。やっぱり、こいつは危険だ。

「そ、その……初めてなので 痛く

「だ、ま、れ、つ！ この変態天使がつ！」

この馬鹿は危険だ。限りなく、そして激しく危険だ。俺の第2回脳内会議で、36対90で危険天使に認定された。とりあえず、この姿を元に戻してもらおう。それから、こいつをじっくり料理しよう。

「わ、わわわ、わたしを、た、た、たべるんですかー！」

「黙れと言つてゐるだらうがつ！ 天然馬鹿天使つ

「ひ、ひどいですー！ ……つわあーん」

大口を開けて泣き出した馬鹿天使の涙が、まるで噴水のようにアーチを描いてゐるのだが。

なんか、昔見た漫畫を彷彿とされる光景だな。

「泣く前に、俺を元に戻せよつ！」

「やですつ！」

「早つ！ 即答かよつ。しかも泣き止んでるし

嘘泣きとは上等だ。必ず復讐してやるから覚えていりよ。あんな事やこんな事を

「変態です……智明様」

「つるさいつ！ いいから戻せ！」

「やつ！」

頬を膨らませて、ソッポ向いてしまつたリームは、何を思つたのか不意に俺を方へ向き直ると、満面の笑みを浮かべて、

「だつてー、可愛いんだもんつ」

「こらつ！ 離せ、馬鹿 いや、お願ひ離してつ

俺を抱き上げると、自分の顔を近づけて今にもキスをしそうなくらいの位置に持つてくる。

まじかで見ると……畜生、一瞬だけ可愛いなんて思つた俺が嫌

いだ。

「私は好きなんですよ、キヤット！」

「……なんだ、ソレ？」

「天界で流行つていいるキャラクターですよ。知らないんですか？」
「知るわけないだろう つて、うおっ、だからっ！……やめろ
つて！」

俺の顔に頬ずりをしてくるリームの顎が、くすぐつたいやら、恥
ずかしいやら、勘弁して欲しい気持ちでいつぱいなんだが。
「これは、神様が試供品の薬をくれたんですよ」

「……ん？ なんの事だ？」

「きなり話しざ始めたリームが、止まる事なく続けていく。
「その薬が『キヤットラの素』つていう薬なんです」
「ほおー……もしや、それを俺に」
「はいっ、神様が使つて来いって言つから、試しに使つてみました

嬉しそうに俺を振り回すリームが、田の前の顔は、とつても幸せそ
うな顔をしている。が、それが悪魔に見えるのは、気のせいいか？
こいつ、本当に天使かよ。

「それで……戻る薬は、あるんだろうな？」
「……えー」

不貞腐れて顎を膨らますリームが、完全なる悪魔に見える。
「も、ど、せ、つ！ い、ま、す、ぐ、つ！」
「そんな可愛い声で脅しても駄目ですよ」

「うつせえ！ さつさと戻せえー！」

「畜生！ 動けたら、こんな奴……一思いに。

「……エッチ

「お前は、いちいち俺の考えを読むなっ！」

「むうーー！ そんな事言つてると、戻してあげません！」

「なつ！ ……なんて卑怯な天使なんだ」

額に怒りマークを浮かべて怒つてるリームは、俺を見て”あつか

んべー”をしてきた。

「いつ、絶対に子供だ。精神年齢は間違いなく、三歳児並みだと判断した。

「天使は、人助けをするんじゃないのか？」

「うつ！……それは」

「目の前に、困ってる人がいるんだけど」

「本当に困ります？」

ジト目で疑いの眼差しを向けるリームは、俺を持ち上げて更に疑いの目を向ける。

なんて、疑り深い天使なんだ。誰だ、こいつを教育した奴は教育がなってないぞ！

「俺の目を見る！ 困っている目をしているだろうが！」

「樹脂製の瞳。……えいつ」

「えやあー！」

田潰しとは卑怯な！ 瞳がないので閉じる事も出来ないのに。なんで、こんなところだけリアルに作ってんだよ。

「何をするんだよッ！ めちゃくちゃ痛かったぞッ」

「あははっ……おもしろくて、つい」

「つい……じゃねえよ…」

チロツツと舌を出して片目を瞑るリームは、申し訳なさそうに笑みを浮かべている。

なんだ……俺はこいつに遊ばれてるのか？ 俺の威厳って言いつのが、まったくないぞ。

「うなれば、強行策に出てやる

「さつさと戻せッ！」

「嫌ですー！」

「戻せー！」

「嫌ですー！」

「も、ど、せ、つー！」

「む、り、で、す、つー！」

何度も繰り返す押し問答に、いい加減うんざりして疲れてきた。
どうしたらいいんだ……ん?

最後、なんか変ではなかつたか? 僕の聞き間違いではなく

「なんだ……無理つて?」

「だつて です」

「はつ?」

何かを喋つたのだろうが、リームの声が小さくて聞こえなかつた。

「何だつて?」

「ないんですつ!」

「は? ……何が?」

「だから、持つてないんです!」

「何を……?」

段々嫌な予感が と、言ひより確信がしてきた。
こいつの事だ。この後の言葉は大体の想像がついた。

「戻す薬、持つてないんですつ」

涙を目にいっぱい溜めて、リームは俺を持ち上げたまま、それこそ何かを失敗したメイドさんが許しを請うよつな顔をしている。やっぱり、そう来たか。とりあえず、俺は「うしじょう 酷さん」の期待に応えないといけないし。

「なんだとー!」

俺の絶叫が響いたところで、こいつをどうしてくれよう。そもそも、なんで俺はこんな事になつていいんだよ?

「だから……それは」

「お前は喋るなつ!」

「酷いですつ! 天権侵害です」

「やかましい! 天権侵害つてなんだ!」

「私、天使ですから……」

なるほど、それで天権侵害か？ 納得した ではなくてつ！

駄目だ。こいつと話してると、エンドレス地獄に落ちそうだ。

「早く、何とかしろよ！」

「出来ません！」

「なんだとつ！」

「だつて……出来ないもん！」

頬を膨らます仕草は可愛いが、いい加減頭に来た。

「ブリッ子してるんじゃねつ！」

「むうー！ 智明様のばかあーー！」

「うあつ！ ちょ、まー」

俺を片手で掴んで立ち上がると、思いっきり振りかぶるリーム。そして、野球選手もびっくりの投球フォームで繰り出された剛速球

というか俺つ！

迫り来る壁。やばい！ 走馬灯が、憎たらしくくらいの笑顔で走り去つていぐぞ。

ペちつ！

「あつ……」

最後に聞こえたのは、馬鹿天使の間抜けな声だった……。

猫虎の素～完～

『おいつ！ これで終わりかよ！ 俺を元に戻せーー！』

『無理、でーす』

(後書き)

思いつきで書いた小説？です。
無茶苦茶なないようですが、読んでいただきありがとうございました。
感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4662a/>

猫虎の素

2010年10月8日15時19分発行